教育活動とは何かという根源の問いかけから

養護学校における医療的ケアの問題で、教師が医療的ケアに手を出すと授業を中断することになり、他児に迷惑をかけるので、もしやるとするなら、教師の人員増が条件というような意見を耳にすることがある。この意見の背景は理解できないでもない。

でも、「医療的ケアは、看護師が行い、教師は教育だけを…」というのであれば、医療的ケアのために授業を中断する当人の授業とは、教育活動とは、どういうことになるのだろうか。「条件が満たされたら、やるよ」に類する意見には、どうしても教育活動とは何かという根源の問いから引っかかる。

かといって、医療的ケアも、教師は全て手を出すべきと言っているのではない。個々の事例の検討・検証から、子どもの障害状況により、その教育活動に周りの支援を得ることで、より効果的な教育活動が行えると思うからこそ、他職種（看護師等）との具体的連携が必要なのであろう。　まず、そうした事例の教育活動の検討・検証が先にありきで、そこから問題提起という展開の一面も生じてくるものと思う。

親は産んだ子どもから逃げる訳にいかず、見捨てる訳にいかないが故に、家庭的にも社会的にも子育ての条件が整わない中で、苦悩しながらも子どもと向き合い、色々工夫している。そして、その実践・体験から、育児条件を整えるべく、社会に問題提起もして、それが色んな制度整備のきっかけともなっている。

子どもや親に寄り添うということは、それぞれの立場・状況の中で、子どもや親と同様に自らの問題として向き合い、取り組むからこそ、共感が生まれ、真の連携が生まれると思う。

先の当 HP　「『共感してくれる仲間』」と「『直感」』で感じてもらうには」と、「ある母親とのＨＰでの出会い」に記載の母親の云わんとするプロとは、決して、「条件が整えば実施します」というようなプロのことではないと思う。条件が整わない状況の中でも、共に苦悩し歩んでくれるプロを望んでいると思う。

また、自分の置かれている今の立場の条件枠に合わないものは、対象にあらず！という無意識の感覚が、社会のあらゆる差別化に繋がることに気づいて欲しい。

それ故に、障害児・者に係わり合う方々からまず、無意識を意識に揚げて、各自の内面の問題として検証していただきたいと願う。

（2004 年 09 月 28 日　記）